

ミステリ読書案内

2024. 12. 29 発行元

第625号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

片岡翔『その殺人、本格ミステリにさせません。』

10月に光文社から片岡翔の『その殺人、本格ミステリにさせません。』が出た。前作の『本格ミステリに仕上げます。』も興味深い作品だったのでその続編に期待は膨らむ。今回はどんな仕掛けが待っているのか…。

「本格ミステリ」がテーマ

前作の『その殺人、本格ミステリに仕立てます。』は、本格ミステリ好きには非常に魅力的な作品だった。「館もの」であり、限られた登場人物の中で連続の殺人事件が起き、名探偵が登場して論理を組み立てて事件を解明するという…。多少のゴタゴタ感があったものの評価に価する出来だった。次作が出るとわかった時から楽しみが膨らんでくるというものだ。

光文社は初版の印刷部数をかなり抑えているようで私の住む地方小都市の書店にはほとんど回ってこない。よって、本書は仙台に出た時に手に入れることができた。

今回は「百々目館殺人事件」

内扉を開くと「登場人物一覧」、そして次頁には「百々目館」の図面が提示される。本格ミステリはこうでないと…。ただ、この百々目館の構造はあまりにも複雑で、図を見た

だけでは理解できず、本文の説明を読んでも正確なところはよくわからないというのが正直な感想。トリックに結び付いているのだが、「あれ？あれ？」と思う箇所が…。理科系頭の私でも二回、三回と前に戻って確認をしないと合点がいかなくなったりして…。

建物の中心に巨大なエレベーター(本文中では「匣」と書かれている)があり、しかも建物自体が地下に埋まっている構造。そして、各扉の位置が合わないという出入りできず、各部屋の間には「目」のような形の細い隙間がたくさん存在する。複雑過ぎ。凝り過ぎ…。

ミステリ映画の撮影が目的…

前作に登場した偉大なミステリ作家・鳳垂我叉の一族が関わっている。著名な映画監督の鳳災子が百々目館を舞台に名作ミステリ映画を企画。そこに登場する名探偵役として音更風(風の漢字に濁点がついて「ふう」と読ませている)が参加さ

前作を振り返ると…

前作『その殺人、本格ミステリに仕立てます。』は2022年7月に光文社から出ている。この私の『ミステリ読書案内』では第396号で取り上げている。「天狗館」での事件で開始になるが、メインになっているのは「鬼人館」の事件。本書の内容にも直接結び付いている。

られる。館に到着すると間もなく最初の殺人が…。「匣」の下降により地下の奈落で一人押しつぶされるというもの。自分たちの命をかけての行動が開始される。次々と仕掛けられてくる罠の数々。誰が味方で誰が犯人なのか…。

終盤は本当に盛り上がる

中盤までは、建物の構造を理解するのにかなりの労力を取られるが、終盤入ってからの盛り上がりはよく出来ている。絶対絶命の窮地に追い込まれるのだけれども、毒ガスの恐怖に耐え、時間のリミットもクリアすべく探偵の「風」が犯人に対峙しながら推理を展開していく。「なるほど、よく組み立てられている」と感心する。前作よりも納得できる結末のように思えた。

歌田年『BARゴーストの地縛霊探偵』

10月に宝島社文庫から出た本。歌田年は『紙鑑定士の事件ファイル・模型の家の殺人』で『このミステリーがすごい!』大賞を受賞した後、『紙鑑定士の事件ファイル・偽りの刃の断罪』『紙鑑定士の事件ファイル・紙とクイズ密室と』を出したが、本書はそのシリーズから離れて新しい形式にチャレンジしたもの。「あとがき」でも触れられているが、アイザック・アシモフの『黒後家蜘蛛の会』シリーズを意識したとのこと。安楽椅子探偵のパターンであり、参加者が事件についているんな意見を述べた後、後ろで目立たなくしていた人物が真相を解き明かすという流れになっている。舞台は「BARコースト」。でも、第二話からは幽霊となって出てくるので「ゴースト」というわけだ。多くの作家が手掛けているのパターンなのだが、歌田年の手腕もなかなかのもの。よく出来ている。

第一話『BOOZE01詐欺』。作家の川田、映画雑誌ライターの赤井、傍で話を聞いている「ぼく」、バーテンダーの小山、見習いの慶子などがあれこれと会話を楽しんでいる。二階から足音のような響きが…。その謎の元がわかったところに松葉杖をついたヒゲ君という客がやってくる。彼は先日巻き込まれた「幻の芝居チケット」の話始める。その話の裏に隠されていた事実を暴きだすのは…。謎の解決が面白いというだけでなく、過去の名作ミステリや映画の話がふんだんに盛り込まれていることが読んでいて楽しい。「紙鑑定士」の題名のせいで「紙の専門家」と思っていたが、相当のミステリ好きであることがわかる。